

### ベルリン・プロジェクト(Berlin Project)

日本における地域主権と「新しい公共」は、いかにして実現可能か。21世紀のEU諸国は、文化多様性を促進する立場から、スマートでサステイナブルな都市文化政策を打ち出している。とくに、分権先進国ドイツの現代文化政策は、各地域の文化的多様性を保障し、公共圏における文化価値を重視することで、極端な市場のグローバル化、「暴走する資本主義」に対抗する新しい価値観を創生し発信している。そこで、多様性を保障するドイツの文化政策・文化環境のフィールドワークを通じて、地域主権時代の都市文化政策のあり方を原点から構想することが「芸術文化環境の国際調査研究」と題した本プロジェクトの第一の目的である。

第二の目的は、より具体的なアクションを必要とする。先端的な文化政策の実践によって個性を発揮している都市間・地域間をネットワークし、まずはグローバルな課題をローカルな視点で共通認識するための、もしくはローカルな課題をグローバルな視点で共通認識するための、インターローカルなフォーラムを継続的に構築したい。そしてグローバルな社会問題の解決を目指して、文化政策の立場から行動できる仕組みを、国境を越えて創りたいと願っている。その具体的な展開として、わたしたちは神戸ーベルリンー別府を往還する調査研究を進め、多様な社会階層と文化的背景を持った人々に開かれた討議空間を紡ぎあげようと努めている。しかしなぜ、神戸ーベルリンー別府なのか。

自治体財政難と格差社会の拡大は、グローバル化の負の側面として捉えられるが、他方「ユネスコ・創造都市ネットワーク」の推進に見られるように、都市間レベルでの文化協力によって、文化多様性を尊重した都市文化政策が近年、注目されるようになってきた。わたしは日独文化政策の研究交流、及び文化協力事業を長年にわたり推進してきたが、平成23年4月からの半年間、ベルリン自由大学の招待により、パフォーマンス文化についての国際共同研究プロジェクトに従事することができた。

神戸とベルリンは、ともに「ユネスコ・創造都市ネットワーク」に認定されている。わたしは神戸市の政策提言と事業評価に微力ながら関わってきたが、ベルリンの文化政策・芸術文化環境についての調査は十分ではなく、両市のネットワークも具体化していない。21世紀の先進都市は、文化多様性、社会包摂、ダウンサイジングなどを新しい価値観として再生・創生されるだけでなく、さらにグローバル化の中で急成長してきた新興国の諸都市とも真摯に対話していくモラルが問われる。学生・院生が、多文化共生の先端にある都市の文化政策と芸術文化環境を調査研究することによって、神戸大学が、文化多様性、地域主権、社会包摂などを尊重した、もうひとつのグローバルネットワークの担い手となり、ひいては「国際公共性」を形成する世界的な拠点となることが期待されている。

わたしはベルリン自由大学に出張していた期間中、8月中旬から9月後半まで、7名の派遣学生らを引率して「文化的多様性を促進するドイツ文化政策の調査研究」を実施した。ベルリンのアートシーンでは複数の文化が力強く混交し、ジャンルを超えた出会いと創造の連鎖反応が相次ぎ、先端的芸術が日々生み出されている。その背景には、高度に制度化された既存の芸術と、それを超克しようとする美的実験のせめぎあいがある。とりわけ移民、外国人比率が際立って高い国際都市ベルリンは、文化的・民族的背景の異なる市民・住民のコミュニティを、ゲッター化やアパートヘイトとは全く異なる方法でホスト社会に有機的に融合させ、斬新な第三の文化・アートを生み出すための文化政策を推進している。そのコンセプトと現状について、

多様な分野にわたってヒアリングを中心に精力的なフィールドワークを実施した。調査先の一例をあげると、ラディアル・システム、ベルリン国立東洋美術館、ハウス・アム・ヴァルトゼー、ベルリン・コミシエ・オーパー、ベルリン・ドイツ・オペラ、コンツェルトハウス・ベルリン、フィルハーモニー、ゲーテ・インスティテュート首都オフィス、キャラリー村田&フレンズ、バルハウス・ナウニンシュトラッセなどである。それらの調査研究の成果については、本報告書に収録されたドキュメントおよびテーマごとの研究ノートをご笑覧いただき、ご批判を賜りたい。

しかし、わたしたちが調査プロセスで実感したことは、連邦やベルリン市州が推進している「文化政策」の以前に（もしくは並行して）このまちの遺伝子には、その歴史的・政治的背景に起因する固有性、特殊性が濃縮されており、そこからベルリンでしか起こりえない「マイクロユートピア」がきらめき出ている、という驚きの数々であった。そうした経験を、長谷川祐子は最近、東京都現代美術館で開催された『ゼロ世代のベルリン展』のカタログの中で絶妙に言語化している。

社会主義の敗北は、その理念を共有していたユートピア主義者たちの行き場を失わせ、矮小化された日々のユートピアへと向かわせた。ベルリンという都市が彼ら残党を魅了する部分は、グローバル資本主義が、世界の他の都市と比較した場合、より小さな成功しかおさめていないという点である。...

アートの世界では美術館、マーケットが価値と需要の形成において重要だが、ベルリンはいずれも他の大都市にくらべて脆弱なため、インスティテューション批判や市場批判が有効ではない。展覧会の機会は日常風景の中にある。...

ベルリンにおいて、政治的なものと感性的なものとの関係は、他の都市よりもはるかに健全にみえる。それはベルリンの遅延によるものだろうか。ここでは感覚に関わる表現が戦略的ではなく、より純粋な形で生産されているかにみえるのだ<sup>1</sup>。

アーティストやクリエイティブ・クラスにとって、ベルリンは現在、世界で最も刺激的で躍動感にあふれるトレンドイな都市である。ヨーロッパの東西が劇的に出会う文化的混交と変容の最前線であり、イノベーションのための文化資源の坩堝とあってよい。とりわけ家賃の安価な旧東独地域は、若手のアーティストやクリエイターが多彩な実験をするための自由な空間にみちている。ベルリンは、まるで磁石のように世界中の若い芸術家を引き寄せ、裏庭のアトリエ、転用した工場、ガレージなど、至る所に新しい美術とパフォーマンスの空間が生まれている。多種多様な技能と才能をもった人たちが、ゆるい共同体を形成して相互に刺激を与えあう環境が自生し、アートによる産業遺産のコンバージョンも枚挙に暇がない。そうした「生き物」としてのベルリンの「パフォーマンス・カルチャーの絡み合い」を、わたしたちはつづきに体感することができたが、その背景を以下の三点に集約してもよいだろう。

- ① ロンドンやニューヨークにあり、ベルリンにないものは高度な資本の集積である。ベルリンは国際的な金融センターではない。
- ② さまざまなチャレンジを必要とするデザイナーにとって、ロンドンやニューヨークよりも生活費が安いベルリンには外国から多くのクリエイターがやってきて、ここに根を下

<sup>1</sup> 展覧会カタログ (2011)『ゼロ世代のベルリン わたしたちに許された特別な場所の現在』東京都現代美術館、p.9。

ろしやすい。

- ③ 若者に固有のある種の軽さをもった「サブカルチャー」が、ベルリンにはたっぷり育っている。

その他にも、わたしたちのプロジェクトでは、文化政策研究の専門家のレクチャーや意見交換を、一面では消化不良を招くほど数多く実施することができた。とりわけ9月2日から8日までの1週間は全員がベルリンを離れ、ポーランド・チェコの国境三角地帯にあるゲルリッツ大学付属ザクセン文化インフラ研究所を拠点として、ローカルな国境地域で行われている、文化多様性を保護・促進する文化政策についてフィールドワークを行った。旧東ドイツの「辺境」にある小都市が国境を越えたレベルで展開している複数民族・複数文化の相互交流、およびハイブリッドな文化的ポテンシャルの開発を目指す先進的文化政策について、多数の調査と討議を行う機会に恵まれたのである。

とくに歴史的に複雑な文化的・領土的問題を抱えてきたシュレージエンの中心都市ブレスラウ（ヴロツラウ、現ポーランド）、およびズデーテンラントのリベッツ（北ボヘミアの文化都市）などの都市を調査し、ドイツ・ポーランド・チェコの国境を越えた「ヨーロッパ都市」としてのアイデンティティの形成と民族的・国家的アイデンティティとの相克、そして文化的多様性を生かしたインターローカルな文化発展の可能性と課題について、実地に学ぶことができた。本報告書には、それらの希少な調査研究も収録されている。

なお、わたしは平成24年度も半年間ベルリン自由大学に出張することから、本プロジェクトを継続し、神戸大学がグローバルネットワークの拠点となるために、ベルリン自由大学との共同プロジェクトを本格的に立ち上げたいと望んでいる。

### ベップ・プロジェクト(Beppu Project)

2009年5月、わたしは別府で開催された現代芸術フェスティバル「混浴温泉世界」を訪れ、めくるめくような知覚の変容と価値観の転換を経験した。その主催者であるアートNPO「BEPPU PROJECT（別府プロジェクト）」は、「新しい公共」づくりの社会実験の最前衛で奮闘しているが、その活動目的には、美学と社会哲学との融合を目指すわたしの思想と交響する社会文化的コンセプトが、きわめて簡潔に語られている。

「社会の中におけるアートの価値を再発見、もしくはあらたな意義と可能性を見だし、この場所でしか実現できないユニークな試みを、それがたとえ、分からないといわれるものであっても、日常的に地域に提供し続けること」。BEPPU PROJECTの究極目的は「多様な価値が共存する魅力ある社会の実現」なのである。このコンパクトなマニフェストの中には、アートと社会の関係をめぐる構成要素が余さず凝縮されている。

BEPPU PROJECTは、普遍性（ここでは時代と場所を超える人類共通の価値を第一に意味する）と特殊性・固有性・唯一性（ユニークネス）との関係を、どのように扱うべきかを模索しているが、「混浴温泉世界」の総合ディレクターを務める芹沢高志の以下の根本認識は、わたしたちが取り組んできたアートマネジメントによる新しい市民社会創生の理念と根底で共鳴する。

1951年に生まれた私は、さまざまなグローバル化をライブで体験してきたし、ごく自然に、この地球そのものを、「故郷」と感じる。そう思うのが、感覚的にも一番心地良かったからだ。「地球人」としての私の意識は、この惑星の自然や文化の多様性をなによりも大切

に考えてきたが、しかしその同じ意識が経済のグローバル化を推進し、環境や生活を均一化し、多様性を抹殺してきたのなら、なんて矛盾に満ちた悲しみだろう。地球社会を平衡化させていくグローバル化なんて、私はまっぴらごめんなのだ。...私が思いつくことなどたかが知れているが、しかしこれだけは信じられると思うのは、拡大成長の神話は確実に終わった、あるいは終わらさねばならないということだ。地球人としての意識を維持したまま、地球平衡化に立ち向かうとしたら、マッチョな物質的拡大思考に終止符を打ち、われわれは創造的な縮小に向かわねばならない。GDP が中国に抜かれてもインドに抜かれても、かまわないじゃないか。国の理念として、経済的な繁栄より精神的な充足を重視するブータンのような国だってある。われわれには、もっと注力すべきことがあるはずだ。...物質的な意味での縮小は恐れるに足らない。絶対に避けねばならないのは想像力の縮小なのだが、現実はその逆になっている。...とはいえ、今の政治や社会がこうした課題に応じてくれるのか、自信はない。ならばどうするか？こう言ってしまえば元も子もないけれど、結局は個人個人の美意識に戻るしかない。自分自身で鏡を見て、そんな生き方は醜くないか、心の声に耳を傾ける。群れて、美意識を平均化してはいけないうし、他人を理由にする必要もない。個人の美意識に従って、個人にできることをやりぬくだけだ<sup>2</sup>。

わたしたちがなぜ別府にこだわり、神戸ーベルリンの都市間ネットワークに別府を接続させたいと熱望したかの理由は、引用した芹沢の明察に看取できるだろう。先進諸国はどこも拡大成長の神話の終焉を迎え、「定常型社会」（広井良典）を持続可能にする新たな構想力を必要としているが、奇妙なことに世界の諸都市は、その経済的・社会的発展過程とは無関係に「創造都市」を錦の御旗に競い合っているのだ。もちろん「創造都市」の理念は、従来の「グローバル都市」とは峻別されねばならない。佐々木雅幸（大阪市立大学教授）の説を借りれば、「グローバル都市」が金融資本と高度専門サービス業を稼働させることで社会的格差を拡大したのに対し、「創造都市」は市民の創造的活動を基礎とする文化と産業（創造的産業）の発展を軸に、水平的な都市間ネットワークを広げ、文化的に多様なグローバル社会と社会包摂的なコミュニティの再構築を目指している、とされる。

### 都市とは誰のものか？ 創造的都市破壊をこえて

しかし、ユネスコの唱導する創造都市のネットワークが、文化多様性の保護・促進の立場から、いかにして芸術文化を生かした社会包摂的なコミュニティの再生に寄与しうるのだろうか。その具体的な展望はまだ見えてこない<sup>3</sup>。むしろ、わたしがドイツのいくつかの都市で目撃してきたものは、「創造都市」の美名のもとにアートが資本家と政治家の道具として利用され、ジェントリフィケーションの過程で使い捨てにされる芸術家やクリエイターの、怨念と反乱である。たとえば2009年秋に、「創造都市」を標榜するハンブルクを中心街で起きた暴動は衝撃的だった。若いアーティストたちは、次のようなマニフェストを掲げて、「都市は誰のものか？」を市民にラディカルに問いかけた。

アメリカの経済学者リチャード・フロリダが、「創造的階級」にとって快適な都市だけが

<sup>2</sup> Think the Earth PAPER vol.8, 2011年4月。

<sup>3</sup> 国際シンポジウム『グローバル化と文化多様性のせめぎあい』神戸大学大学院国際文化学研究科紀要、2011年3月参照。

繁栄すると計算して見せて以来、ヨーロッパにはある妖怪が歩き回っている。「ゲイとロックバンドの無い都市は、経済発展競争に負ける」とフロリダは書いている。多くのヨーロッパの大都市は現在、創造的階級のための移住地域となるように競い合っている。ハンブルクにとって、目下この誘致競争は、都市政策がしだいに「都市イメージ」に従属するというありさまとなってきた。大切なのは、一定の都市のイメージを世間に広めること、すなわち、あらゆる傾向の文化創造者に刺激的な環境とベストチャンスを提供する「脈動する大都市」というイメージだ。マーケティング会社の仕事は、「ハンブルク・ブランド」というイメージをメディアに浸透させることである。...

親愛なる立地政治家さん、わたしたちはハンブルクについてマーケティングの範疇で語ることを拒否する。...あなたたちの「成長する都市」は、実際には隔離都市である。それは19世紀に、プロムナード沿いに恵まれた境遇の者たちを集め、群集はその外部の労働者住宅に集めたのと同じである。わたしたちは「ハンブルク・ブランド」の広告キャンペーンをしているのではない。...

わたしたちは主張したい。都市はブランドではないし、企業でもない。都市とは「共同存在=コモンズ Gemeinwesen」である。大切なのは、ハンブルクの生活が「成長都市」を目指す集団に属さない市民にとっても、生きるに値するものとなるような場所を征服し、防衛することである。わたしたちは都市への権利を奪還する——（企業）立地のファクターとなることを拒否するハンブルクの住民とともに<sup>4</sup>。

わたしたちのベルリンでの国際調査プロジェクト、そして別府で継続してきたグローバルな討議空間「混浴“学生”世界」は、このような「創造都市」のディレンマをのりこえようとする「つぶやき」にすぎないが、その際の原点は、芹沢が語ったように「創造的な縮小」が「想像力の縮小」にならないことだ。想像力の自由な飛翔は、芸術家と若者の特権である。しかし、想像力のはばたきを都市やコミュニティの空間デザインに反映させ、異なったものたちの共同存在を具現する関係性構築の道は、果てしなく遠いだろう。わたしたちは、サスキア・サッセンの以下の言葉を肝に銘じて、それでも探究を続けたいと思う。

ここ10年ほど先進国の大都市でみられるようになった暴動は、おそらく不平等が先鋭化していることの現れである。都市の魅力的な地区と戦争状態にある地区との間に生じているこうした格差は、きわめて大きなものとなっている。こうした格差は一目瞭然なので、無関心をきめこんで富を貪っている新たなエリートと無力感に苛まれ憤激した貧しい人々の間の闘争は、ますます無慈悲になりがちなのである。

経済力や政治力をほとんどもたない主体は、文化と帰属意識をめぐる新たな政治、経済のグローバル化が生み出した新たな地理的力学に根ざす新しい国家を超えた政治をつうじて、ますます確固とした存在となってきた。両主体とも、ますます超国家的になり、またますます対立しつつ、自らの戦略的な活動の場を都市に見出している。しかし都市は対等な競争条件を備えた場とはほど遠い<sup>5</sup>。

<sup>4</sup> 2009年10月末、Manifest Not in our Name, Marke Hamburg!

<sup>5</sup> サスキア・サッセン（田淵他訳）（2004）『グローバル空間の政治経済学』岩波書店、pp.56-57。

## 「混浴“学生”世界」とは一山出さんとの出会いから、アート・マンス参加まで—

そもそもの始まりは、筆者と山出淳也さんのインターネット上でのふとした出会いであった。彼は、NPO 法人 BEPPU PROJECT (ベップ・プロジェクト) の代表をされている。2009 年に、本 NPO の牽引により、別府現代芸術フェスティバル「混浴温泉世界」が初めて開催された。注目していたものの、その時はフェスティバルに行くことが叶わなかった。2010 年月 4 月、山出さんのトークイベントが東京で行われるという情報をネット上で知った。山出さんの発言に対し、思わず、「東京なのですね。関西でもトークをやってくれませんか」と書き込みをした。すると即座に返事が帰ってきた。「場所があれば、是非行きたいです。」まだ会ってもない一学生にこれほどフラットに接してくださることに、驚き、感動した。山出さんは話の早い人である。あれよあれよという間に会場も日程も決まり、早速 6 月に山出さんと神戸の文化関係者らのトークセッション、「場所とアートの魔術性—神戸と別府の場合—」が実現した。この時の白熱した議論は、また稿を改めて報告したい。

その後、2010 年夏に、「ベップ・アート・マンス」という月間企画に参加しないか、とご連絡をいただいた。アート・マンスに参加すれば、別府市民やその他全国の団体が、1 ヶ月にわたり市内各所で芸術・文化イベントを開催するのを、広報・会場など様々な点において BEPPU PROJECT にサポートしてもらえる。言わば、アート・マンスは、市民主導の文化を実現するためのプラットフォームとなるのである。

アートマネジメントや文化政策を学ぶ私たち学生は、何ができるだろう。やはり、「混浴」を実践することではないだろうか？

私たちは、芸術文化の理論を学び、芸術文化に関わる現場を手伝う。この理論と現場の往復が私たちの学びである。しかし、それを改めて振り返り、議論する機会は意外と少ない。学校を越え、地域を越えて、同じ分野の学生に集まってもらい、お互いの経験に学ぶ必要があると考えたのである。

2 年目は、学生だけでなく、一般の人にも参加してもらいたいと思うようになった。とりわけ、「よくわからないアートなるもの」が数年前に入って来たであろう別府市民に、来てもらいたかった。そこで、副題を、1 年目の「学生による、学生のためのフォーラム」から、「みんなのためのアートの語り場」に変更し、多様な参加者によって、〈文化とは何か〉、〈どこからどこまでがアートなのか〉といった、青臭くも重要な問いを突き詰めていくこととした。依然として、多くの別府市民に来てもらうのは難しかったが、こうした他流試合こそが大事だと感じている。次年度の「混浴“学生”世界Ⅲ」では、如何に地元の人々や、マネジメント側に限らずアーティストらに議論に参加してもらうかを考えたい。

本冊子に収録されたフォーラムの文字起こしは、出来るだけ録音そのままの形を保って仕上げた。話が噛み合っていなかったり、遠回しな議論をしたりしている箇所が散見されるが、そうした細部にも、もし何か今後生きるものがあればと考え、ほぼ全ての議論を収録した。

ご多忙の中、自身の発言を何度もご確認くださった参加者の方々に、深く御礼を申し上げます。

**[開催概要]**

「混浴“学生”世界Ⅰ—学生による、学生のためのフォーラム—」(2010年)

11月3日(水)

1日目「アートマネジメントの人材育成に関するラウンドテーブル」

11月4日(木)

2日目「コミュニティとアート」

11月5日(金)

3日目「自治体文化政策」

11月6日(土)

4日目「グローバリゼーションとアート」

「混浴“学生”世界Ⅱ—みんなのためのアートの語り場—」(2011年)

(キャッチコピー：アート／文化ってなんのため？ 学生が開く、座談会)

11月4日(金)

1日目「こどもとアート」

11月5日(土)

2日目「ちいきとアート」

11月6日(日)

3日目「アートマネジメントの人材をそだてる」

※「混浴“学生”世界Ⅱ」広報ページ URL

(BEPPU PROJECT 作成、最終閲覧 2012年1月10日)

<http://www.beppuartmonth.com/app/program/40023>

